
幻想ノ祭

竜頭蛇尾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想ノ祭

【Nコード】

N3849E

【作者名】

竜頭蛇尾

【あらすじ】

どこかの街のお店の話。そのお店は白い兎が経営していて、数々の依頼をこなしてきました。そして、いろいろな謎も解決してきたのです。そんな感じの物語。

第一夜ノ準備 白兎

陽気な太陽が空一面を明るく照らし、街の人々に活気を与えるはずの春。

街の頭上には暗雲と呼ぶにふさわしいほどの黒い雲が、あたり一面に広がっており誰もそれに手を加えることのできないまま、人々は毎日を過ごしていた。

「空、晴れぬか」

街には長い長い通りが何本も通っており、一番太く、そして一番長い通りを街の人々は別にそこまで意味はないけど「メインストリート」と呼んでいた。本当に意味はない。ただ、その通りを利用する人が恐ろしいほど多く「人々のメインに使われる通り」ということで「メインストリート」になったというのが、一番少ない説。

先ほど独り言を発した生物は、そんな「メインストリート」の横に店を構える白い兎^{うさぎ}。いや、大きな耳を垂らした兎のフードをかぶった目が蛍光色の黄色で肌が黒い生物だ。着ているものはRPGでよくある魔術師だか魔道師だか魔導師だか知らないが、それっぽかった。全体的に緑色で、所々紫の入る怪しい一言で表せる服装。「さて、今日も開店の時刻が近づいているな」

兎は独りつぶやく。悲しみかあるいは怒りか、様々な感情の感じられるその一言が部屋を一気に照らし始めた。

彼の言葉が合図になったかのように、部屋の明かりがつき室内の雰囲気さがらりと変わる。ソファが動き始め、椅子がダンスを踊り、テーブルは宙を舞うし、食器棚と食器はミュージカルでもしているかのようにくるくる回る。

「準備完了」

兎の静かなこの声が終了の合図なのだろう。声と共に動いていた家具達は、また声と共に動きを止めた。何事もなかったかのように止まった。

兎は右手をゆつくりと、それこそ虫取りでもしているかのようにゆつくりと前に突き出す。よく見ると、親指と中指がくついている。そして、次の瞬間。

「開店！！」

兎の顔が凶悪な顔に一変し、そのまままるで恐喝でもしているかのように、大声を張り叫ぶ。その声と同時に右手の親指と中指でパチツと鳴らした。右手が向いていたのは外。

外の『閉店中』という看板がくるりと一回転し、『開店中』という筆ですすりがきでもしたかのように書かれた文字が書かれている看板が姿を現した。

「客は…来る気配なしと見た」

兎は静かにその部屋を後にした。階段を上る足音だけが部屋に響いていた。

「すみませ〜ん」

部屋に響くは清らかな高き声。静けさが残る部屋を響かせるに十分な声であるのと、二階にいる兎を呼ぶには十分な大きさの声だった。

兎はふてくされた顔で階段を下りてくる。くねくねと体を捻じ曲げながら白いフードの目つきが一心不乱に何かを見つめる。ふてくされた顔は凶悪な顔であるような言いような、言ってしまうえば素の顔がああ目つきなのかな　少女はそう思った。

「何か用かな？」

「あ、ここって依頼受けてくれるんですね？」

「おや、お客さんでしたか。少々お待ちを」

兎は右手をひょいと上げて、親指と中指でパチツと音を立てる。その瞬間、兎の右手に大量の書類が現れた。少女は急なマジックにばかりとしていたが、大量の書類が現れたことと共にここに来るべき理由を思い出した。

「この前の猫騒動なんですけど」

「少々お待ちを。猫猫猫：ああ、あの屋敷の猫」

「その猫を捕まえてほしいなあ…って思ってた」

「…ふむ。其の猫のことなら契約金として1000G又は1000円、それが1000ルピー等かかりますが」

兎は大量の書類の中から「猫騒動」と呼ばれる事件について書かれた書類を捜した。

この街はかなりの事件が起きており恐ろしいほどの量の事件書類が管理されていた。黄色く光る、蛍光色の黄色い瞳はかなりの速度で探しているのか、黒い皮膚の上を上下に行ったりきたりしている。まあ、その様子は周りから見たら恐ろしいもので。少女がびびっていたのは言うまでもない。

少女の持っていた袋の中から500Gと500円が見つかった。

兎はじいーつとそのお金を見つめていると、右手でそれをぎゅーつと握り締めた。少女の口から「あっ」という悲鳴に近い声が聞こえたが、兎はその後、右手をぱっと開いて見せた。右手には何も入っていなかった。

「依頼中に邪魔になるものはこの部屋のどこかに異空間転送しますんで。大丈夫」

「この屋敷ですか」

「うん」

ボロボロに壊れかけた屋敷は果てしないときの中でその存在を忘れられたように、あちこちの壁面にひびが入っていた。

植物の蔓が屋敷の壁面を恐ろしいほどの数が埋め尽くしている。締め付けるように、また、成長の過程で支えにするわけでもなく、うねうねとした蔓は壁面を埋め尽くす。

依頼してきた少女の名はアリス。何でも騒動の猫を飼いにいきたと親に頼んだら、これでさっさと猫飼ってきなと言われたそうで、

一人でこの街へやってきたのだという。そこで、昔から聞いていた『依頼の頼める便利な店』に行くことにしたそうで。

まあ、要するにわがままな小娘ということだ。

「…では、猫探しといきますか」

「うん」

純粹なだけか、それともただ捻くれた性格なのか、何を考えてみても初対面の相手の前では無力だ。とりあえず歩きながらいろいろ聞き出すか。それとも、あっちから語りだすのを待つか。そのどちらかも兎は面倒だった。

屋敷の扉をゆっくりと開ける。まるで巨大な何かが齒軋りでもしているかのような、キリキリとした音が扉を開ければ開けるほどする。少女は、耳に手を当ててなんとか音を防ごうとしている。防ごうとしても防ぎきれないその音が少女の耳から鼓膜へ伝わるには時間がかかるはずもない。別に数100m先にいるわけでもないのだから。

少女の目が兎に移る。ゆっくりとしかし、確かに前へ進む兎の耳は、耳は、器用にたたまれていた。くると巻いたのか器用にも器用すぎて気持ち悪いと少女は一瞬思った。その耳が吹けばくるくる回ってピューとでも鳴りそうなくらいくるくるしていたからだ。少し頭がおかしくなったのかもしれない。

ようやく音が止まる。

「…このロビー。日の光がまったく入りませんね」

「…この屋敷の構造は、私知らないわよ」

「誰もあなたに聞いていませんよ。依頼主さんは私の依頼の邪魔をするつもりですか？」

「そんなわけじゃ」

「ならば、静かに」

「…」

しかし、困った。少女が唯一のこの屋敷内を知るかもしれない存在だったのに。別にそんなつもりも確証もないのに自分から言い張

るとは……。悲しきだが、これは我俣娘^{わがまむすめ}と考えよう。
その結果だが……。なぜだか恐怖しか出てこない。

第一夜ノ前夜祭 猫騒動

日の光の入らないはずのロビーは、ほのかな明かりを残していた。誰かが今でも使っているのか、それとも、電気がただ今でも流れているだけなのか。兎には何も分からない。分からないのでもない。知ろうとしないのが事実か。

ロビーは十分な広さを持ち、中央に階段、階段の隣に巨大な支柱が2本。ロビー端に見える扉の数は左右合わせて、6つ。多いな。この中から猫を探すのか。猫：そういえば。

「そういえば、この猫の種類は」

「特殊な猫で：一般的にはチェシャ猫と呼ばれているわよ」

いきなりの話しかけでもびくりともしないこの少女、一体神経に安定用のネジか何かでもねじ込んであるのだろうか。少女は、兎の話しかけの返答を即答した。即答の内容に躊躇いができていたのは、チェシャ猫という猫の種類が特別だからだろうか、それとも、即答したことに後悔でもあったのか。

とにかく探そうとしている猫がチェシャ猫ということは：

「大変な猫探しになりそうだ」

「どうしてよ」

「普通の猫ではないからだ。理由はこれで十分だろう」

「：そう」

今の一声は悲しみの声でも、困惑の声でもない。ただひたすらにその心の温度を摂氏の限界点まで下げようとしたほどの、そう、その声はかなりの冷徹な一声だった。

「この部屋の血しぶきは、この前の猫騒動か」

部屋全体をこれでもかと赤く塗りつぶした血の痕跡。縦横無尽に駆け巡るように天井、床、壁、家具全てに血しぶきが飛んだようで、

ほんのりと赤い痕跡が残っている。この部屋に入った人物は鑑識だとか、国家関係職員だろう。この部屋の異様な様を未来に伝えていくわけがないといわんばかりに、ほんのりと残った痕跡以外はきれいなまま保たれ、まるでまだ家具だけはどこからか持ってきたと思われることも可能だろう。

「すいませんね、アリスさん」

「何がよ」

兎の後ろから部屋の様子を見ていた少女に、兎はいきなり話しかけた。まあ、話しかけるといふよりは疑問をぶつけたただけだが。

「猫騒動について教えてもらいますか？」

「何よ、いきなり礼儀正しくなっちゃってさ。テヒヒ、でもいいわよ」

なんだこの口調は。最初に会ったときの礼儀作法が崩れかけているではないか。親しくなつた途端にすぐ、これか。ひどい少女だ。

「テヒヒ。あ、これ人と話すときに出ちゃうから気にしないで。猫騒動はね。とある夜に猫を探しに屋敷内を歩いていた屋敷の主人が何者かに殺されたつてのがきっかけらしいよ」

少女は部屋の中央に向かって歩き出す。

「テヒヒ。その後、なぜだか知らないけどその後の夜に誰かの足跡が聞こえて、翌朝誰かが死んでるつてことが続いたの。その結果、屋敷の主人の家は没落。いろいろ調べたみたいだけど何も分からなくて、犯人がいまだに逃走中つてこと」

「なぜ、お前はそんな猫を欲しがる」

「そんなの簡単よ。その猫が珍しいから」

メインストリートと呼ばれる懐かしさを感じる通りを歩く自分。ケラケラと頭の上が笑い、それに続けてかばんの中の物達が笑う。いろいろな物が意思を持ち『笑う』。その笑いに続けて笑おうと口が変化し始めるが、我慢する。こんなところで笑っては気味悪から

れるのが落ちだ。

メインストリートの一角に、一軒の家がある。その家の主人は自分の友達なのだ。自分を理解してくれるのだ。いろんな意味でだが・・・。笑わない、笑わない。

「む？」

ふと、その家の目の前の看板に目をやると『外出中』という目を疑うような文字の言葉が縦に並んでいた。気のせいだろう。そういえば、家の中の明かりがついていない。気のせいだろ・・・？

扉のドアノブに手を伸ばし、グイッと回してみる。固い・・・鍵がかかっているようだ。嘘だろ。嘘だろ。頭の中にいろいろな理由、嘘という文字が無限に増殖し始める。嘘、いや、嘘、いや、・・・。「・・・ヒヒヒ!!」

途端に笑い出した自分を抑えるべく、その家の向かい側に向けて「開店」とつぶやく。自分の持っていたかばんからいろいろな家具が飛び出す。絨毯から始まり、テーブルや椅子、本棚にポット。合わせて食器棚。その光景はメインストリートを通る一般人からしたらへんな光景にしか見えない。なにせ、そこには一つの部屋が誕生したからだ。

そして、もう一度つぶやく。

「開店、帽子屋」

テーブルの上に置いたかばんから数多くの帽子が、絨毯の上に並べられる。

「とりあえず、白兔が来るまで帽子屋でもやっていようかなあー」
自分がそうつぶやいたのが合図なのだ。自分の頭の上に乗っていた奇妙な目や口がついていた帽子が笑い出した。目がニヤニヤしながら、口が大きく開いて笑う。しまった、つられて笑ってしまう。
メインストリートの一角に甲高い笑い声が響いていた。

「ちよつと・・・どこ行っちゃったのー!!」

薄暗くまるでお化け屋敷のような屋敷の中に、少女の声が響く。

街外れということとその声の響きに合わせたの、外の蝙蝠こうもじの空へ舞い上がる羽ばたきが聞こえた。蝙蝠こうもじの羽ばたきはこの屋敷内のムードを極限まで高めた。少女はゆっくりと屋敷の廊下を歩く。

不安な感情が高まるのが分かる。辺り一面に感じられない生物反応。この道を進めば……。

「……？」

ふと気づく、生物反応。目の前にいる。何かが。黒い何かが。信じられない。生物？ この屋敷に？ 生物がいたのか……。あの時……。いや、まさか。

廊下の突き当たりの窓には暗闇が広がっているのが確認できる。

雲一つない、暗闇だ。すると、その窓の下に黒い何かが立ち上がる。ひょこつ。今まで暗闇しかなかったはずのその空間に怪しく光る恐ろしい蛍光色。その光は……。まるでこの先に進むことを危ないと照らす信号機あかりの灯。禁止の一步手前の恐ろしい光。故に逃げなければ。

「シャー……！！！！！」

屋敷内に猫の鳴き声が響いた。

第一夜ノ祭 チェシヤ猫

「おい」

暗闇の屋敷に響く声。さて、この少女どうするべきか。叩くか、蹴るか。だめだ、目を覚ます方法に打撃攻撃以外ない。しかし、ここは実行する以外ないだろう。

ドカツ。とりあえず殴る。白兔の脳には声をかけた後、打撃攻撃を加えるということ以外無かった。それでも目を覚まさなかったのだ、兎はこうつぶやいた。

「猫」

「むわっ!？」

訳の分からない叫びと共に、その目の前の少女は目を覚ます。覚ましたら覚ましたで何かを叫ぶ。叫び声が暗闇の屋敷に響く。近距離でさらに、耳のでかい白兔からしたらいい迷惑だ。史上最強のうるさを誇り、恐らくこの地上で最大の音波を出しているのではないか。

とりあえず黙らせる。

「むぐふ」

「黙れ。とりあえず一帯は探索してきたが猫というより生物反応一つも無い。『うじ』だろうがゴキブリだろうが普通は存在するはずなのだな」

白兔はそう言いながら、白兔の右手によって口を閉ざされた少女を見つめる。明らかに何かを疑い、何かを・・・何かを・・・。

「さて、最後に取っておいた最上階の大広間を探しに行こうか」

「・・・」

沈黙の少女を連れて、白兔は廊下の先にある階段を目指して歩き出した。

さび付いたドアを開け、なぜかは知らないが最上階に作られた大広間に足を踏み入れる。暗闇に支配されたこの部屋。

しかし、何だ、何かが違う。他の血塗られた部屋を掃除したあの感じと……。

「……ああそうか」

白兎はそうつぶやく。

「……あの時から気づいていたけれど、まさか本当にそうだなとは」

つぶやいた白兎は、さらに足を勧める。彼は大広間の中央に立つ。すると、暗闇に支配されたはずの部屋の所々が赤く光り始めた。赤い光はだんだん真つ赤な血の気のする色彩に変わる。

これは……間違いない。血だな。

「ここだけです。守りに守って自分の居場所だけは確保してきた。さらには、私の命をも狙いますか」

白兎は一度も後ろを振り返らずに、ただ淡々としゃべっている。

すると、白兎の右手辺りに赤い光が集まり始める。

「血の気の多いあなたへの贈り物。ファイアボール火炎球！！」

白兎が後ろに振り返る瞬間か、それともその前からか。

白兎の後ろには巨大な猫が口を大きく開けて前足で飛び掛るように、姿勢を固定していた。白兎は右手の光を猫に放ちながら、大きくバックステップで間合いを取る。

「チエシャ猫……やっぱりか」

「シャー」

大きな猫は威嚇をするように声を大きく張り上げる。白兎の蛍光色の黄色い目が、猫を見つめる。まだ、右手の赤い光は消えていない。

兎を睨む猫の背後には燃え上がる扉があつた。さっきの白兎の攻撃を避け、その攻撃は扉に当たっていたのだ。シャーシャーと猫は威嚇する。

白兎はその様子をただ見つめ、こう口にする。

「口調の変化の激しいお人はあんただけじゃない。俺もたびたび変化する。それが日常ですからね」

さらに、白兔は右手で八の字を描く。描いた軌跡からいくつもの火の玉が猫めがけて飛んでいく。大きな猫はいくつもの火の玉をその巨体からは想像もできないほどの身軽さで、避けていく。

「腐っても鯛・・・いや、腐っても猫か」

「くつ。カアアアアツ・・・兎さん・・・兎さん・・・なぜ私が猫だと・・・」

「おおっと！？ 言葉をしゃべりますか！？ まあ、別にいいですよ。あの時のことをお話しましょう」

にやりと笑う兎は狂ったような口調に変化し、猫に語りかける。

廊下を進む音は、靴底が廊下を蹴る音ではない。猫がゆつくりとひたひたとこちらへ向かってくるだけ音がするだけだ。おそらく、向こうはこちらの姿が見えているのであろう。猫だからだ。

「来ますか」

暗闇の屋敷の中、その光る蛍光色の黄色い目を前に向けながら、窓の下で兎はうずくまる。

電気がここだけ通っていないのか、この廊下は暗闇に沈んでいた。外の鳥の羽ばたく音が窓から聞こえる音がうるさい。暗闇に響くその音は、その音しか存在しない屋敷内では十分うるさい音だった。ただ一つ、ゆつくりと歩いて向かってくるこの足音を除いて。

ピョイツ！！ 奇妙な効果音が出るのは仕方ないことなのだ。なぜか知らないけれど、兎が飛び出たり足で跳んだりする瞬間、周りが静かならば周りに存在する生物が聞き取れる音量で、周りがうるさければ周りに存在する生物が絶対に聞こえる音量で、奇妙な効果音が出る。昔からなので仕方がない。ともかく、フードをかぶっているのはこちらが兎だとばれてしまう。

あの少女が一番怪しいので、猫の特性を探ることにした。まず第

一に、こんな暗闇の廊下を何にもぶつかることなくまっすぐ歩いてこれるかどうか。歩けるならば、それは『廊下が見えている』ということだ。普通の人間でも訪れたばかりの暗闇でいきなり目が慣れるなどということはないだろう。猫は夜目が利く。少女の姿でも少女と猫の共通部分には猫の部分がでてしまうだろう。そうでなければ白だ。

「！！！」

少女がこちらに気づいたようで、いきなり逃げ出した。一瞬だけ見たのだが、彼女の体に傷は一つもない。ということは、この屋敷内に入ったことがある者が、夜目が利く者か。

とりあえず追うことにする。これだけではまだ断定できない。フールド無しだとなんだか変な感じがするが……。とりあえず追う。

暗闇に続く音を頼りに彼女を追う。すると、いきなり彼女はこちらに振り向き、少女とは思えない声と目、体の使い方に変化した。その声は確実に。

「シャー！！！」

猫だ。

この威嚇の仕方といい、泣き声といい、構え方といい。なにより、一定の間合いを取ってからこちらを睨みつける。確か猫の特性だったような……。とにかく、相手は猫だ。疑いたくはないが、あの少女が猫なのだ。

とりあえずこうする。

「ふんっ！」

力を入れるつもりで少し声で力み、一定の間合いを取っている『猫』に対して一気に近づいた。一步分の瞬発力でなんとか届いてよかった。そのまま右手を相手の眉間にぶつける。そして、手のひらで相手の頭を何かにぶつけるように掴んだ。これで逃げることはできないはず。

唐突な攻撃に猫はとまどい、じたばたする。兎は無視してもう少し力む。

「ふあああああああ！！」

怒涛のごとき声を張り上げながら、兎は右手に力を入れる。すると、右手に黄色い光がまとい始めた。猫もやばいと思い出したのか、さらにじたばたし始める。が、兎の左手が突進をするかのように猫のちょうどお腹の辺りに直撃する。

「ふがつ」

猫のひるみを瞬時に確認し、兎はさらにおたけびのような声を上げ、兎の右手がパチパチと異様な音が鳴り始める。右手の光にはいつの間にか電撃が流れ始め、その音、その状態、全てが限界に達すると思われたとき、いろいろな声を張り上げていた兎はこう叫んだ。
「電撃放出！！」
スパーク

叫んだ瞬間、暗闇が明るく照らされた。廊下の隅から隅まで見えるほどの明るさを放つその電撃は、猫の頭に直撃した。兎はしばらくその状態で、猫がそのまま背中から廊下へなんのためらいもなく倒れるのを確認して、一呼吸する。

「・・・とりあえず他の部屋に行ってみるか」

兎の足音が廊下にべたべたと響き渡る。倒れた少女に背中を向け、その暴行現場に一番近い部屋に兎は入っていった。

「というわけだが・・・納得していただけたかな！！」

最後の語尾に特徴的な変化を残して、今度は右手に赤い光、左手に黄色い光をまといながら兎は華麗に舞いだした。右手と左手がふらふらと動き、その動きの軌跡から火炎の球と電撃の球が猫に襲い掛かる。不規則な動きから飛び出す不規則な弾丸を猫はまたもや巨大な猫とは思えないほどの身のこなしで避ける。

避け終わった猫は、兎を今までにない形相でにらみつけている。フシューだとかフシャーだとか兎には疲れているようにしか感じられない声を出していた。

そろそろ限界なのだろうか、この猫。そう思った兎はこう猫に言

い放つ。

「あなた自分自身で『チエシヤ猫』だって言いましたよね」

「フツフツ・・・フツ・・・」

興奮している猫もその言葉が気にかかるようで、兎の話に耳を傾けた。

「しかしですね、私から見ればそれはそれはそんな風には見えないことで」

兎は静かに息を吸い、まるで深呼吸でもしたかのようにゆっくりと息を吐くように猫に告げた。

「その姿・・・『チエシヤ猫』なんかじゃない。まるで・・・『化け猫』だ」

第一夜ノ後片付け 猫と帽子と兎

「シャアアアアアアアアア！」

その声が合図となつて怒りを心に宿したのか、猫が猛烈な勢いで兎に襲い掛かる。前足を前に出し、爪を立て、後ろ足でまるで100m走のスタートのように床を蹴り、飛び掛った。

「心……ありますか」

兎はそうつぶやくと、ゆらりと流れるように攻撃をかわす。さて、どうしたものか。魔法で攻撃してもいいが、あのすばやい動きではどうにも当たる予感がしない。

「フツ……フツフ……フツ」

猫の呼吸が整わない。これはチャンスか、それともピンチか。

「いろいろ試してみる必要がありますね」

兎は、その両手を前に出し、ゆらゆらと八の字を描かせる。腕の軌跡にはいくつもの光の球が出来上がつていき、兎の掛け声を合図にそれぞれいろいろな方向から猫に襲い掛かる。猫は右上からきた光の球を前に飛んでかわすと、すぐ左から別の光の球が来ていた。そのことに気づいていた猫はそのまま下へしゃがみ、左へ移動する。後ろから来ていた光の球が左に動いた猫の横をものすごい勢いで通り、天井に直撃した。

「なかなかやりますね」

猫は残る5つの光の球も軽々と避け、兎をにらみつける。凶悪な顔は、人間離れ……いや失敬、猫離れした顔を思わせる。さて、どうしたものか。

動きを止める方法はあるにはあるが……。威力が高く、殺傷能力の高いものは使えない。とりあえず幻覚でも見せたいが、自分はそのほど得意じゃない。

そうだ。『あれ』を使おう。しかし、そこからは。

「願わくば、その身のこなしで華麗に避けてください。この攻撃は

少々ありえない破壊力を持つもので」

この攻撃でこの猫との闘いに決着が着く。と、兎は思っていた。兎はバックステップで猫との間合いを広げた。かなり広く、居合い切りでも入れない距離だ。

「右手に炎を、左手に雷を」

兎はなにやら魔法の発動のためのような言葉をつぶやきだした。不審に思った猫は、これが最後、と覚悟し兎に向かって突撃する。

兎の右手には赤い光、左手には黄色い光が輝きを増し始めた。両手を前に出し兎はさらに声を張り上げる。

「汝ら、この『因幡の白き兎』を核とし、巨大なる砲撃を用意せよ！」

言い終わった瞬間、両手にまとっていた光が消え、兎の目の前に巨大な砲台のようなものが現れた。兎は砲台を両手で構え、突撃する猫に向ける。

その姿は異様で、今にも噛み付くかのように開いた砲口。砲口の淵ふちに付けられた鋭い突起。砲台の体を支える三つの鋭く、それでいて平たい突起。その様子はまるで 鯨さめ。

「二度同じことを言うが、願わくばその身のこなしで華麗に避けよ！ 長期戦が嫌いな自分が開発した『威嚇専用巨大鯨型砲台』の力を！」

感情が最高潮にまで高まっているのか兎が叫べば叫ぶほど、そのかぶっているフードの兎の目がギリギリと鈍い輝きを増していく。まるで、捕らえた獲物を駆る狩人か、獣の鋭き目。

猫が近づいているのを無視して、兎はさらにこう叫ぶ。

「充電開始」

鯨型砲台の砲口に異様なエネルギーの集合体が集まり始める。具体的に言えば、なにやらパチパチとしたものとメラメラとしたものとパチパチとしたものと、なんとも言葉で表現しにくい異様な音を立てた光が入り混じっている。

その光の輝きが、音が大きくなると共に増していく。猫が、

その砲台の目の前にまで飛んできた。

「準備完了！ いざ、目の前の全ての獣を絶望、恐怖、憎悪、殺戮、凶悪、最強によって最大限までに脅かせよ！ 超凶悪な砲台の攻撃」

兎の掛け声のようなく分らない声が合図なのか、銃口が震え始め次の一声ひとこえによって、集合したよく分らないエネルギー体が猫に向けて放たれた。

その一声とは。

「『幻想しんげんの如き破壊おこくりもの』！！」

「すみませんでした。テヒヒ、本当に。いえ、本当ですって……。もう、信用してくださいよ」

「……」

血まみれの娘が、背中を壁にもたれながらしゃがみこちらを見ている。この娘、少女という体格ではない。なんというか……。うん、高校生。そして、おかしいだろう、彼女の頭の左上に猫耳が生えている。それが『左上だけに』だ。

黒髪のショートカット。それでいて、丸顔。さらには、青い瞳。……。ん？ この娘、左目が青く、右目が赤い。どういうことだ……。まあ気になるのはそれだけじゃないのだが。

「それにしても……。すごいですね……。アレ」

「炎と雷の集合体を放った。エネルギーが消えるまでは永遠にああなっているぞ」

大広間の壁には、ひびが入り、さらにそのひびに炎やら雷やらよく分からないエネルギー体まで、全部が沿ってひびを埋めている。まあ、一種の防犯トラップ……。とは呼べないほどの危険さを持つが。

そのエネルギー体を猫にぶつけた。まあ、所詮は『威嚇専用』なのでそこまで威力はない。というか『あるわけがない』。直撃した

としても、かすり傷ぐらいか。

「さて、チエシヤ猫。こうなったわけを話してもらいたいな」

兎は自らの右腕を倒れている娘の顔面の目前に突き出す。威嚇とは言えどもその腕には殺意のようなものがこめられている。

「・・・むう」

娘が顔をしずめて、少し重い雰囲気の中語り始めた。声は少し震えている。恐怖か？ それとも悲しみか？

「三ヶ月前くらいかな。この屋敷に私は拾われたの。その辺の道端でニャーニャー鳴いてるときに」

「三ヶ月前・・・」

「まあ、そこからは普通の猫みたいに暮らしてたんだけどさ。ある日、屋敷の主人が変な帽子を買ってきたのよ」

「帽子！？」

兎は『帽子』という言葉に強烈な反応を見せた。帽子・・・か。

少女は少し兎を見つめたが、気にせず話を続けた。

「その日がちょうど一ヶ月前。その日から、帽子を持っている人間が夜中に歩き出して、私を殺そうとしたわ。消えたら消えただで帽子が誰かの部屋に置かれてるのよ。それを気味悪がる人もいたけど、ほとんどの屋敷の人は私のせいだと思ったみたい」

「殺そうとした・・・？」

「ええ、最初は首を握り締めようとしたりしてきたけど、次第には包丁やら、銃やら。戦闘態勢に入ってから私の圧勝だったけど」

「それで、お前がこの屋敷に入ってきたアリスと俺に目をつけた」

「そういうことー」

「ふむ・・・嫌な予感がする」

屋敷の外では、蝙蝠がばたばたと羽ばたき、木々の葉を揺らしざわめきを作り出していた。

「ヒヒヒ・・・」

メインストリートの一角にはまだ謎の声が高らかに響き、こちらはざわめきとどよめきを作り出していた。

第一夜ト第二夜ノ狭間 事務所の存在

我らのような不特定生物の多くは『事務所』と呼ばれる職場にいる。そうでなければ、国や自治体に消されるからだ。存在を守りたいがためにどこかの事務所に就く。これ当たり前。

その多くが、野生化から転職と言えるのかどうかは知らないが、職業として事務所に就くため、管理系の職業に就くことは少ない。では、どういう職業に就くのか？

先に述べた通り、管理系の職業以外にも職業があるのだ。

その職業の多くは、依頼現場へ直接行き依頼内容を達成する、いわゆる外回り役。これを通称『彷徨い』^{さまよ}と呼ぶ。簡単に言えば野蛮な職業だ。

具体的に言えば私のように、外に出て何かを狩るという職業。『彷徨い』は野生化から職業化した生物にとって、簡単であり危険な職業。一長一短な職業。

しかしながら、その職業が不得意な奴らがいるんですな。不特定生物にも様々な奴がいますからな。

「さて、チエシャ猫よ。お前これからどうするつもりだ」

白兔が、ぐったり疲れた『猫』に話しかけていた。猫は、赤く燃えるような瞳と青く冷徹さを持つ瞳で白兔をにらみつける。話をする気分じゃないようだ。というか、憎しみなのか俺に対してさきほどから『にらみつける』しかしてない。

「なんかしゃべってくれませんか？」

「別に・・・あんたのシリアスな顔を見てたら気分下がっただけよ。これからねえ。国でも自治体でも連れて行けば？ 住み着いて人を殺した事実が覆るはずないし。第一、もうここに要る理由もないし」
「なら連れていく」

「へ？」

猫の白兎に対する目がその言葉を聞いて変化する。赤い瞳は希望を宿し、青い瞳は透き通った瞳に。そのことに、気づいたのか気づかないのか白兎はそのまま言葉をつなげる。

「お前を連れていく。私の事務所、人少ないので来てもらえろ、いえ、来てください」

白兎のしゃべり口調はいつもの他人との会話を進める感じに変化していった。

「とにかく連れていく。『彷徨い』の仕事には勧誘もあるのさ」

『彷徨い』の仕事は獲物を狩ることだけじゃありません。帽子を売るだとか、勧誘するとか、帽子を売るとか、または帽子を売るとか・・・資金を集めることも仕事ですが・・・。

『勧誘』というのはすばらしいことで。それ一つするだけで褒め称えられ、事務所内での地位が格段と上がることもあるものです。それを狙って世界に勧誘活動に励んで旅してる人もいますがな。それは、目的を見失っているともいえるのら。

・・・しまった。我慢してたのに癖が出てしまった。我慢してたのに・・・。

まあ、それは置いて。

『彷徨い』の仕事と対になる仕事、その不得意な奴が勤める仕事。その仕事は、情報を管理することに秀でた能力が必要とされる。その名を『留まり』と呼ばれる。

留まりの名を持つ者は、依頼により舞い込んできた情報をまとめ、整理する。その整理により、数百万の情報を瞬時に探し瞬時に相手に出すなど、機能面で効率が増す。

故に、絶対に必要とされる者だ。

留まりになるためには、事務所で正式な登録をするだけだ。何にも難しいことはない。故に、誰でもなれる。だがならない。

。なぜかというと、本当になぜかというと、先ほども述べたが・・・

「う!？」

「この情報の管理を頼めますかな？」

「無理です」

白兎は、右手でふわふわと白い柱を支えている。その白い柱は、実は依頼書の束。数百万に上る依頼書は、どこに収納するということが出来るはずもなく、そうすれば部屋の中にただ無造作におかれるということしかできなかった。

ふわふわと何かの力で依頼書の束と呼ばれる白い柱を浮かしている白兎を目の前に、猫はソファに座る。ふわつとした感触が良かったのか、ソファを何度も見つめなおしていたが・・・。

猫の口が開く。

「絶対に無理です。私ってさあ、活発な女の子じゃん？ 外で騒ぐ総長じゃん？ 完全にバイク乗りこなすじゃん？」

「それは暴走族だ」

「とにかく家でうじうじは無理なのよ」

「・・・なあ、猫」

「んにゃ？」

話が終わったと感じ、そのままソファに横になろうとしたところを、白兎の言葉が寸止めする。猫は、ほほを膨らまし精一杯『怒り』を表現していた。

「お前、アリスの体どうするつもりだ」

「によ？」

「ずっと、とり憑いてるが何か？ テヒヒ。何か問題でも？ テヒヒ」

「お前は霊か。その特殊能力もいずれか消える。特殊能力最大限放出は己の存在意義を賭ける。簡単に言うと、お前死ぬぞ」

「へ？」

「とにかくさつさとアリスから離れる」

白兎の手が猫の頭を鷲掴みにする。ぎりぎりともるで本気で握りつぶすかのように猫の頭をつかんでいた。掴れる方にとっては、強烈な痛みを伴う。それ故に、それを外そうとする。猫は両手で白兎の手を握る。

「電撃放出」
スパーク

「ギヤアアアアア！！！！」

猫の声と思われる叫び声が部屋に響き渡る。強烈な叫びは、家具のガラスを問答無用に振動させ、テーブルをも地震が来たかのように震えさせた。

またか。白兎の思いはただそれだけだった。

冷静になってから（近距離で大声を聞いて恐ろしいほど耳が痛かったので、冷静になれなかった）、目の前の猫だったものを確認する。

ちょっと身長が縮んだ？ いやいや、これが本来の姿。

目の前のアリスは目が白目で、まあ簡単に言えば放心状態だった。

ちなみに事務所の管理系職業は人間でもできるのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3849e/>

幻想ノ祭

2010年12月14日19時11分発行